

文芸資料研究所蔵 『源氏物語和歌』 解題・翻刻

上野英子

一 書誌

新装紺無地帙入り。写本一冊。袋綴（四孔・白糸）。白地に緑の松葉・星模様を刷った紙表紙。表紙寸法縦約二三、三×横約一七、〇浬。表紙左肩に題簽剥落の痕あり。剥落題簽寸法縦約一八、六×横約四、〇浬。題簽剥落の痕に「和歌」と墨書（本行とは別筆）。

前後見返しともに白紙。本文料紙楮。遊紙無し。全百丁。内題無し。

源氏物語の和歌七七首の抄出。（三首重複。また手習巻の中將歌「忘れぬむかしのことも笛竹のつらきふしにも音ぞ泣かれぬ」一首が欠）。片面に四首ずつ記載し、最終丁のみ一首を散らし書きにする。最終丁を除き、和歌はすべて二行分かち書き（二行目には改行一字下げで下句を記す）。和歌本文は青表紙系。特に肖柏本や三条西家本な

どの室町後期の本文に近い。但し卷名・詠者名の記述が無く、和歌の掲出順も全くの任意である。全冊一筆。奥書・識語・蔵書印無し。文芸資料研究所では該書に「源氏物語和歌」と仮題を付して登録してある。

## 二 本文の分析

本文の系統を調べるために、『源氏物語大成<sup>校異編</sup>』（以下『大成』と略）をもとに、まずは冒頭十首の異同状況を試みよう。

1 あふせなき涙の川にしつみしやなかる、みをのはしめ成けむ（須磨）

イ なかる、みをの…大池飯肖三（七宮尾平大）〔御陽〕**文**

ロ なかる、の身をの…横

通し番号を付して掲げた和歌が、該書の本文である。この本文中に諸本の異同がみられる箇所には傍線を引き（複数ある場合には更に①②…等の番号を振る）、本文の末尾には当該和歌の収載卷名を付した。

さて1の場合、諸本はイ・ロいずれかの本文に大別されるようである。諸本の略号は該書を「**文**」とする以外は、すべて『大成』のそれに準じ、また河内本系諸本の略号には（ ）印を、別本には（ ー ）印を各々付しておいた。無印の略号は青表紙ということになる。なお『大成』では系統によって書入れ情報の採用基準を変えているが、本稿では本文の性質を考察する上に必要なものを除き、別本レベルの校異基準でまとめなおしてある。

さて、1の異同では口で青表紙のなかの横山本だけが独自異文となっているが、口の本文では文意が通じない。誤写と判断できそうである。

2 いつしかも袖うちかけん乙女子かよをへてなてん<sup>②</sup>岩のおひさき（漣標）

①イ いつしかも…大家横平池肖三 **文**

口 いつしかや…（御七宮大）

ハ いつしかと…（尾）

②イ なてん…三 **文**

口 なつる…大家横平池肖（御七宮大尾）

『大成』漣標巻に別本は採用されていない。注意したいのは2①。青表紙と河内本とが対立した例であり、該書（**文**）はイの青表紙諸本と軌を一にしている。2②は青表紙系の三条西家本と該書だけが「なてん」という共通異文をとって、他の諸本と対立した例である。

3 なき人もおもはさりけん<sup>①</sup>うちすて、夕のかすみ君きたれとは（柏木）<sup>②</sup>

①イ おもはさりけん…定大横榊陽肖三（宮尾平谿大鳳）〔御保国〕 **文**

口 おもはさらなん…〔麦阿〕

②イ きたれとは…定大横榊陽肖三（宮尾平谿大鳳）〔御麦阿〕 **文**

口 にたれとは…〔保国〕

4 我もまたうき古郷を<sup>①</sup> あれはてはたれやとり木のかけをしのはん（蜻蛉）<sup>②</sup>

①イ 古郷を…大横池肖三（御七尾前大鳳）〔保麦阿〕 **文**

口 故郷に…〔宮陽国〕

②イ あれはては…大横池肖三（御七尾大鳳）〔宮陽国保〕 **文**

口 あれはてゝ…(前)

ハ かれはてゝ…(麦)

ニ かれはては…(阿)

3、4いずれも別本の一部、あるいは河内本の一部に異同があった例であり、該書の本文は大勢の諸本と同様で安定している。

5 鳥部山もえし煙もまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく(須磨)

イ 煙も…大横池飯三(七宮尾平大)〔御陽〕**文**

口 煙も(に)…肖

青表紙のなかの肖柏本が訂正によって、「煙に」という独自異文を構築してしまった例である。

6 見しおりのつゆわすられぬあさかほの<sup>①</sup> 花のさかりは過やしぬらん(朝顔)

①イ あさかほの…御大為池冬耕肖三(宮尾大)〔陽坂平国〕**文**

口 あさかほも…(保)

②イ 花の…御大為池冬耕肖三(宮大)〔陽保坂平国〕**文**

口 はえの…(尾)

別本と河内本の一部がそれぞれ独自異文をとった例。

7 さきの世の契しらるゝ身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよ(夕顔)

本歌では諸本に異同はなかった。

8 あやなくもへたてけるかな<sup>①</sup> よをかさねさすかなれし中の衣を(葵)

①イ へたてけるかな…大横榊池肖三（七尾海大）〔御陽〕**文**

口 へたてつるかな…（宮）

②イ よをかさね…大横榊池肖三（七宮尾海大）〔御〕**文**

口 としをへて…〔陽〕

③イ 中の衣を…肖（七宮尾海大）**文**

口 よるの衣を…大横榊池三〔御〕

ハ 中のこゝろを…〔陽〕

8 ③は青表紙と河内本とが対立して、該書が河内本と一致した例である。前の2①とは逆の結果となったが、青表紙のなかの肖柏本も該書と同様、イの本文をとっていることに注意したい。

9 深山木にはね打かはしるる鳥のまたなくねたきはるにもある哉（真木柱）

①イ はね…大横為池肖三（七宮平大鳳尾）〔陽保長麦阿〕**文**

口 いね…御

②イ ねたき…御大横為池肖三（七宮平大鳳尾）〔保長麦阿〕**文**

口 ねたに…〔陽〕

10 時鳥こととふ 声は <sup>①</sup>それなれとあなおほつかなさみたれの空（花散里）<sup>②</sup>

①イ こととふ…定大横（七宮尾平大鳳）〔御陽〕**文**

口 かたろふ…明

ハ かたらふ…三

②イ 声は…定大明三（七宮尾平大鳳）〔御陽〕**文**

口 こゑも…横

③イ それなれと…定大横明三（七宮尾平鳳）〔御陽〕**文**

口 それなから…（大）

9、10ともに、少数の本文だけが独自異文をとったものである。

以上のようにみてくるならば、該書の異同は比較的穏やかであり、異同の激しい別本群の一本とは判定しがたいようである。では青表紙系か河内本系のいづれだろうか。この両者が対立したとき、該書は2-①では青表紙に、7-③では河内本に一致した。しかし後者は青表紙のなかの肖柏本も河内本と同文になっている。また2-②のように、該書が青表紙系のなかの三条西家本と二本のみ共通異文をとったものもある。このあたりの点に焦点を絞って、もう少し範囲を拡大して用例をみてみよう。

つぎに挙げるA表は、青表紙系諸本と河内本系諸本とがある程度まとまって対立した時に、該書がどのような動きをとったか、その一部をまとめたものである（なお全体像については、翻刻部の備考欄を参照されたい）。本表では上から順に、本表における通し番号・巻名と該書における歌の通し番号を記し、つぎに当該歌のなかでの本文異同箇所を、青表紙・河内本・該書の順に掲げ、最後に識別と備考欄をもうけた。

A表

1	通番号	巻名	歌番号	青表紙	河内本	該本	識別	備考
	箒木		666	数ふれは	かそふるに	かそふれは	口	

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
須磨	花散里	花散里	賢木	賢木	賢木	賢木	賢木	賢木	賢木	賢木	賢木	葵	葵	紅葉賀	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	夕顔	夕顔	簪木	簪木
420	744	616	537	48	499	499	242	614	108	27	324	8	730	677	731	556	723	58	652	753	728	513
かなしき	あれたる	かきねに	にほひをそ	ゆきめぐり	空の	涙をも	ころも	心を	嘆きつ、	あふさか山を	鳴く音を添へそ	よるの衣を	かきくらすころ	引き取られぬる	中の衣に	たるひは	見るへき	夏衣	思ひ乱る、	たかふな	ことの葉そなき	月も
はかなき	あれ行	かきねを	にほひとそ	ゆきかへる	秋の	涙をは	程も	心の	うらみつ、	逢坂山に	ねな鳴そへそ	中の衣を	かきくらすかな	引きとられける	なかのたもとに	たるひも	みすへき	たひ衣	思ひわつらふ	たえすな	ことの葉もなし	菊も
かなしき	あれたる	かきねに	にほひをそ	行めぐり	秋の	涙をも	ころも	ころを	なけきつ、	あふさか山を	なくねなそへそ	中の衣を	かきくらすころ	ひきとられぬる	中の衣に	垂水は	みすへき	夏衣	おもひみたる、	たかふな	ことの葉そなき	月も
イ	イ	イ	イ	イ	口	イ	イ	イ	イ	イ	イ	口	イ	イ	イ	イ	口	イ	イ	イ	イ	イ
												肖「中の衣を」					榊・肖「みすへき」					

30	29	28	27	26	25
明石	明石	須磨	須磨	須磨	須磨
401	743	452	334	775	264
思ひなるらん	雲井に	まよひなむ	かりかねも	よそにも	みるめの
思ひなるへし	雲を	まよひなむ	かりなれと	よそにも	みるめも
思ひなるらん	雲井に	まよひなむ	かりかねも	よそにも	みるめも
イ	イ	イ	イ	イ	口
					横肖三〔別〕「みるめも」

識別欄のイが青表紙と一致したものの、ロが河内本と一致したものである。一部をあげただけだが、結果は歴然である。青表紙と河内本とが対立した三十例中二十五例が青表紙の本文をとっている。五例は河内本と一致したが、うち三例（7・12・25）が肖柏本も該書と同じ本文をもっているのである。

こうした現象は、ほぼ全編にわたって共通しており、数字であげてみると、

(a) 青表紙諸本と河内本諸本とが一冊の例外もなく各々とまって対立した例は全体で六十二例。  
そのうち該書の本文が青表紙と一致したのが五十七例

河内本と一致したのが五例

となる。次に、

(b) 青表紙諸本間に本文異同の対立がみられるのは、全体で五十八例。

そのうち該書と一致した諸本は、肖柏本と三条西家本が各々三十七例

大島本と池田本が各々二十七例

横山本が十六例



となる。統計をこの五本に絞ったのは、『大成』が青表紙として採用した諸本の中には、ごく一部の巻しか現存しない本、あるいは巻によって河内本や別本を多く含む本もあるために、各巻における青表紙校合本としての採用度が比較的均質な諸本に絞ったためである。

無論（b）のなかには該書の独自異文（五例）もみられるが、相対的には該書の本文は青表紙本系であり、なかでも肖柏本や三条西家本など、室町期の本文に近いと位置づけることができるように思う。

### 三 該書の特徴

古来、源氏物語の和歌を抄出した資料は多い。おそらくそれは、藤原俊成が「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」（六百番歌合）と評して以来、源氏物語が歌人必須の教養書として早くから注目され、評価されていたことなどにもよるのだろう。

さて、こうした源氏物語和歌の抄出本の中には、和歌だけでなく、その詠者や出詠状況、簡単な梗概まで添えたものもあった。例えば正徹「なぐさめ草」（群書類従本）によれば、応永二十五年（一四一八）に正徹は、尾張国の童子の求めに応じて「源氏物語の歌双紙」を書き与えている。その跋文によれば、

抜書（稿者注―源氏物語の和歌を抄出したもの）の歌は所々におほかべきを。

（稿者注―この地には）さやうの本もなければ、歌計をとおもひ侍ながら、（稿者注―この童子が）あまりゆへ知がたきなるべければ、あるひは彼物がたりの言葉をひろひ、あるひは十が一の心をあらはしてしるし付ぬ。…とあり、この証言によれば、既に当時から源氏の歌を抜書した本は多かつたようである。また当初は「歌計を」と考

えていた正徹が、源氏物語に不案内な童子のために物語本文を引用したり簡単な解説まで書き添えたとあるように、和歌の前に簡単な説明文を加え、結果として歌の抜書がそのまま源氏物語の梗概書としても利用できるような資料が、自然発生的に出現していったのだろう。

しかし該書の場合、巻名も詠者名もなく、それに何より肝心の和歌が順不同に記されている。各地に散在する源氏物語和歌の抜書のなかには、『源氏物語和歌類句』のように源氏物語の和歌の初句をいろは順にならべたものや、『源氏物語類句』のように第二句と下の句をいろは順に配列したものなどもあるが、該書の配列にそうした規則性は見られない。かといって詠者毎にまとめてもいなければ、部立てを立てているわけでもなさそうである。

該書にある種の規則性が見られるとすれば、それは毎半葉四首書き、各首二行分ち書き、下の句は一字下げの書法にあるといえるかもしれない。例外は最終丁の一首のみ。おそらくそれは最後に一首だけ残ってしまったために、あえて散らし書きにしたものかと思われる。

『夜鶴庭訓抄』（群書類従本）によれば、和歌の書法にはそれなりの規則があつて

一歌を書様、二行ならば五七五<sup>一行</sup>、七々<sup>二行</sup>。三行ならば五七<sup>一行</sup>、五七<sup>二行</sup>、七<sup>三行</sup>まで三くだりにあるべし。たゞ  
手だにうつくしくなばなどいふ事は、むげの事也。さればこそみちはいみじけれ。

という。また『心のたね』によれば「女房の短冊は、下句を一字さげてかき…」とある。してみると、該書の書法はまさしくこれらの注意書きに叶ったものといえるのではあるまいか。書写者はかなり筆癖が強いものの、その運筆には概してためらいがなく、自信にみちた書きぶりである。

さて、源氏物語に掲載されてある和歌は全部で七九五首とされているが、該書に記載されてある歌は七九七首で二

首多い。これは、該書では次の三首が重複して記され、

117 ふる川の楣のもとたちしらねとも過にし人によそへとそみる (15ウ)

485 ふる川の杉のもとたちしらねとも過にし人によそへとそみる (61ウ)

198 雪ふかき山のかけはし君ならてまたふみかよふあとをみぬ哉 (25ウ)

486 雪ふかき山のかけはし君ならてまたふみかよふあとをみぬかな (61ウ)

487 めつらしと古里人もまちそみむ花のにしきをきて帰る君 (61ウ)

783 めつらしと古里人もまちそみむ花のにしきをきて帰る君 (98ウ)

また手習卷の中將詠「忘れぬむかしのことも笛竹のつらきふしにも音ぞ泣かれぬ」一首が欠落していることによる。

また興味深い誤写例としては、明石卷の源氏詠「しほ／＼とまづぞ泣かる、かりそめのみるめはあまのすさびなれども」を

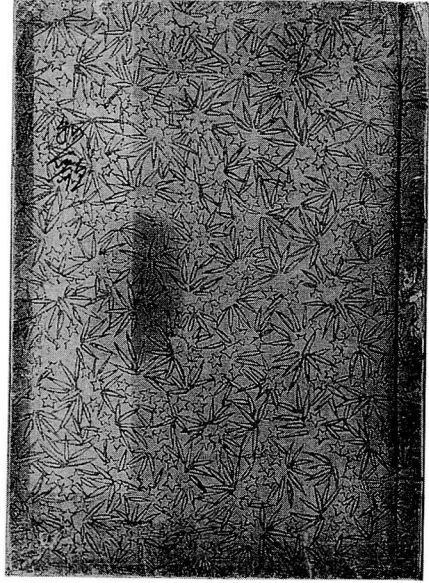
327 しほ／＼とまづそなかる、かりそめのあさ夕きりもはれぬ山里

と書写してしまったこと。下の句が違っているが、これは松風卷の源氏詠

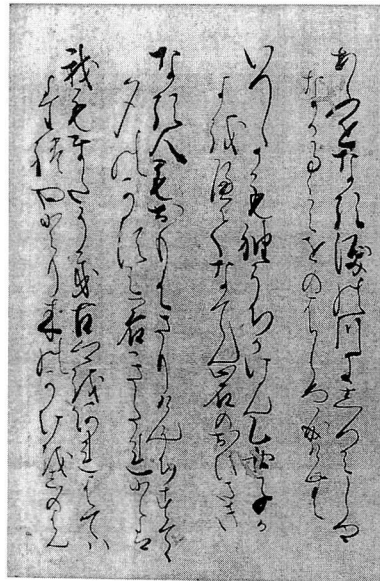
久かたのひかりに近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬ山里

の下の句が混入した結果である。一方、松風卷の源氏詠でも

384 久かたの光にちかき名のみして見るめはあまのすさひなれども



(表紙)



(1オ)

とするので、明石巻の源氏詠と松風巻の源氏詠の上下の句が、入れ替わって写されたことがわかる。

重出歌が三首、欠落歌が一首あるということ、また明石巻と松風巻という離れた巻にあるはずの和歌の上下句が相互に入れ替わっていることなどをみるに、該書は(あるいはその底本でもよいのだが)、源氏カルタのような上下の句が別々になった札を揃えて、源氏物語の和歌として一冊にまとめようと書写したものではなかったか、と思われる。特に何らかの編纂意図があったわけではあるまい。また本文の系統が肖柏本や三条西家本といった室町後期の青表紙本に近いことから、その成立は近世中期ないしは初期かと思われる。

四 翻刻

凡例

(1) 上段には該書の和歌の通し番号・本文(翻刻)・丁付を、中段には備考を、下段には当該歌の収載巻名と詠者名を記しておいた。

(2) 翻刻に際し、分かち書きは一行に統一し、字体も通行のものに改めた。また各種記号の意味は次の通り。

「え(。い)」「え」の下に「い」を補入している。

「え(い)」「……」「え」を見せ消ちに「い」と改めている。

「え(い)」「……」「え」の傍に「い」と傍書している。

「□」……………虫損筭で判読が困難。

(3) 中段の備考欄には、冒頭に\*記号を冠して、虫損や修正等の原本の状況等を記した。

(4) 同じく中段の備考欄には、『源氏物語大成』校異篇をもとに、諸本の主立った本文異同をまとめておいた。但し余白欄の都合上、次のような略号を用いている。

・ 該書の略号には $\blacksquare$ を、他の諸本は『大成』で用いられた略号を用いた。

・ 河内本系諸本の略号には( )印を、別本群の諸本には( )印を冠しておいた。

・ 『大成』に記された青表紙本系諸本が一致した場合には $\square$ を、同じく河内本系諸本が一致した場合には(河)を、別本群諸本が一致した場合には(別)の記号を用いた。

- 1 あふせなき涙の川にしつみしやなかる、みをのしめ成けむ  
 2 いつしかも袖うちかけん乙女子かよをへてなてん岩のおひさき  
 3 なき人もおもはさりけんうちすて、夕のかすみ君きたれとは  
 4 鳥もまたうき古郷をあればはたれやとり木のかけをしのはん  
 5 鳥部山もえし煙もまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく  
 6 見しおりのつゆわすられぬあさかほの花のさかりは過やしぬらん  
 7 さきの世の契しらる、身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよ  
 8 あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかになれし中の衣を  
 9 深山木にはね打かはしゐる鳥のまたなくねたきはるにもある哉  
 10 時鳥こと、ふ声はそれなれとあなおほつかなさみたれの空  
 11 もとつかのほへる君か袖ぬれば花もえならぬなをやちらさむ  
 12 くれなひのひと花衣うすくともひたすらくたす。(猶)したてすは  
 13 おく山の松のとほそをまれに明てまたみぬ花のかほをみるかな  
 14 かき曇日かけもみへぬおく山に心をくらすころにもあるかな  
 15 あめと成り時雨る、空のうき雲をいつれのかたとわきてなかもん  
 16 草わかみひたちのうみのいか、さきいかてあひみんたこのうらなみ  
 17 色かはるあさきをみても墨染にやつる、袖をおもひこそやれ  
 18 香をとめてきつるかひなく大かたの花のたよるといひやなすへき  
 19 枕ゆふこよひ斗の露けさをみやまの苔にくらへさらなん

丁付 備考(主立つた異同・該書の書写  
 状況) 卷名 詠者

1	あふせなき涙の川にしつみしやなかる、みをのしめ成けむ	1ウ	中の衣を☒肖(河)   中のこ、ろを(陽)  よるの衣を大横神池三(御)	須磨	源氏
2	いっしかも袖うちかけん乙女子かよをへてなてん岩のおひさき	1ウ	中の衣を☒肖(河)   中のこ、ろを(陽)  よるの衣を大横神池三(御)	須磨	源氏
3	なき人もおもはさりけんうちすて、夕のかすみ君きたれとは	1オ		柏木	夕霧
4	鳥もまたうき古郷をあればはたれやとり木のかけをしのはん	1オ		蜻蛉	薫
5	鳥部山もえし煙もまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく	1オ		須磨	源氏
6	見しおりのつゆわすられぬあさかほの花のさかりは過やしぬらん	1ウ		朝顔	源氏
7	さきの世の契しらる、身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよ	1ウ		夕顔	夕顔
8	あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかになれし中の衣を	1ウ		葵	源氏
9	深山木にはね打かはしゐる鳥のまたなくねたきはるにもある哉	1ウ		真木柱	兵部卿宮
10	時鳥こと、ふ声はそれなれとあなおほつかなさみたれの空	1ウ		花散里	中川のほとりの女
11	もとつかのほへる君か袖ぬれば花もえならぬなをやちらさむ	2オ		紅梅	紅梅大納言
12	くれなひのひと花衣うすくともひたすらくたす。(猶)したてすは	2オ		末摘花	大輔命婦
13	おく山の松のとほそをまれに明てまたみぬ花のかほをみるかな	2ウ		若紫	源氏
14	かき曇日かけもみへぬおく山に心をくらすころにもあるかな	2ウ		総角	薫
15	あめと成り時雨る、空のうき雲をいつれのかたとわきてなかもん	2ウ		葵	頭中将
16	草わかみひたちのうみのいか、さきいかてあひみんたこのうらなみ	2ウ		常夏	近江君
17	色かはるあさきをみても墨染にやつる、袖をおもひこそやれ	肖三		椎本	薫
18	香をとめてきつるかひなく大かたの花のたよるといひやなすへき			幻	兵部卿宮
19	枕ゆふこよひ斗の露けさをみやまの苔にくらへさらなん			若紫	尼君

20	山里の秋の夜ふかきあはれをも物おもふ人はおもひこそしれ またふりぬ物にはあれと君か為ふかき心にまつとしらなん たえぬへき御法なからそたのまる、よ、にとむすふ中のちきりを 梓弓いるさの山にまとふかなほのみし月の影やみゆると 昔こそまつわすられぬ住吉の神のしるしをみるにつけても	3才	手習 中将 浮舟 浮舟 御法 紫の上 花宴 源氏 若菜下 明石の尼君
21			
22			
23			
24		3ウ	わすられぬ <sup>㊦</sup> わすられぬ <sup>㊦</sup> 御七宮尾平風 〔別〕—わすらね〔大〕
25	氷とち石間の水は行なやみ空すむ月のかけそなかる、 哀しる心は人にをくれねと数ならぬ身にきえつ、そふる ゆくかたをなかもやらんこの秋はあふさか山を霧なへたてそ	4才	〔御陽国〕 あふさか山を <sup>㊦</sup> 〔相〕—逢坂山に〔河〕 うへ <sup>㊦</sup> 〔河〕〔国〕—こそゑ〔御〕—もと 〔陽麦〕
26			
27			
28	あらし風ふせきしかけのかれしよりこはきかうへそしつ心なき	4才	桐壺 桐壺更衣の 母君
29	ひきわかれとしはふれうくひすのすたちしまつの音をわすれめや なけき侘そらにみたる、わか玉をむすひと、めよしたかひのつま すへらきのかさしにおるとふしの花およはぬ枝に袖かけてけり なれきとは思ひいつとも何により立とまるへき横のはしらす	4ウ	初音 明石中宮 葵 もののけ 宿木 薫 真木柱 髭黒の北の 方
30			
31			
32			
33	宮人にゆきてかたらん山桜かせよりさきにきてもみるへく しめゆひし小萩かうへにまよはぬにいかなるつゆにうつる下葉そ 年ふともかはらむ物かたち花のこしまのさきに契る心は	5才	若紫 源氏 東屋 中将の君 浮舟 匂宮 桐壺 桐壺院
34			
35			
36			
37	なかむるはおなし雲井をいかなれはおほつかなきをそふる時雨に うら風やいかに吹らんおもひやる袖うちぬらし浪間なきころ さよ中に友よひわたるかりかねにうたて吹そふ萩の上かせ おほかたのうきにつけてはいとへともいつかこのよをそむきはつへき	5ウ	〔御陽麦〕 いとさなき <sup>㊦</sup> 〔河〕〔国〕—いとけなき 〔御陽麦〕 *「かせ」虫損。
38			
39			
40			

- 見し人の影すみはてぬ池水にひとる宿もる秋の夜の月  
 そのかみやいか、はありし夕たすき心にかけてしのふらんゆへ  
 なみた川うかふみなはもきえぬへしなかれて後のせをもまたすて  
 すまのうらに心をよせし舟人のやかてくたせる袖をみせはや  
 やとり木は色かはりぬる秋なれとむかしおほえてすめる月かな  
 たゆましきすちをたのみし玉かつらおもひのほかにかけはなれぬる  
 里の名もむかしなからにみし人のおもかはりせる閨の月かけ  
 なからふるほとはうけれと行めぐりけふはそのよにあふこ、ちして
- 41 賢木 朝顔齋院  
 42 須磨 臘月夜  
 43 明石 五節  
 44 東屋 弁の尼  
 45 蓬生 末摘花  
 46 東屋 薫  
 47 賢木 藤壺中宮  
 48 賢木 源氏  
 49 行幸 源氏  
 50 紅葉賀 藤壺中宮  
 51 澤標 花散里  
 52 幻 源氏  
 53 梅枝 柏木  
 54 竹河 なれき  
 55 紅葉賀 源氏  
 56 紅葉葉 夕霧  
 57 藤裏葉 夕霧  
 58 夕顔 空蟬  
 59 椎本 中の君  
 60 胡蝶 女房  
 61 須磨 花散里  
 62 若紫 源氏

\*「ひとる」独自異文。「ひとり」の誤写か

6才

6ウ

えり〔別〕

7才

いかにして大横首〔宮尾〕―いかてかは  
 (御七大) 家平池三

7ウ

\*「かたし」独自異文「かさし」の誤写か  
 \*「かへりて」独自異文。「かへて」の誤写か。  
 夏衣 夏衣―たひ衣 (河)〔別〕

8才

色みえて 色みえて―色みゆる (河)  
 (保)





105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82

伊勢の海のみかき心をたたらすてふりにしあと、浪やけつへき  
 はるかにも思ひやるかなしらさりしうらよりをちに浦つたひして  
 へたてなき心はかりはかよふともなれし袖とはかけしと思ふ  
 鶯のさえつる春はむかしにてむつれし花の影そかはれる  
 身にちかく秋やきぬらん見るま、に青葉の山もうつろひにけり  
 旅寝してなを心見よ女郎花さかりの色にうつりうつらず  
 おほかたに花の姿を見ましかは露も心のおかれまじやは  
 いける世のしには心にまかせねはきかてややまん君か一言  
 かはかりは風にもつてよ花のえに立ならふへき匂なくとも  
 めくりきて手にとるはかりさやけきやはしのしまのあはと見し月  
 くもりなき池のか、みに萬代をすむへき影にしるく見えける  
 九重に霞みへたては梅の花た、かはかりも匂ひこしとや  
 夕露にひもとく花はたまほこのたよりに見えしゑにこそ有けれ  
 咲まじる花はいつれとわかねともなをとこ夏にしるく物そなき  
 しらさりし大海のはらになかれきてひとかたにやは物はかなしき  
 月影はみしよの秋にかはらぬをへたつる霧のつらくもある哉  
 うちはしのななき契はくちせしをあやふむかたに心さはくなく  
 嵐ふくおのへの桜ちらぬまを心とめけるほどのはかなさ  
 ふりみたれ汀にこほる雪よりもなかなそらにてそわれはけぬへき  
 なき人をこふる袂のひまなきにあれたるのきの雫さへそふ  
 いつれそと露のやとりをわかむまに小笹かはらに風もこそふけ  
 涙のみせきとめかたさし水にて行あふみちははやくたえにき  
 里とをみおの、しの原分て来て我もしるこそ声もおしまね  
 嶺の雪汀の水ふみわけて君にそまとふ道はまとはす

13ウ 13才 12ウ 12才 11ウ 11才

\*「あはし」の「は」重ね書き  
 \*「しるこそ」独自異文。「しかこそ」の誤写  
 花は池(国)―色は(河)(陽)大松秀三  
 大海のはらに大横池首三(別)―おほうみの  
 のはらへ(河)飯

浮舟	夕霧	若菜上	花宴	蓬生	浮舟	若紫	賢木	須磨	夕顔	真木柱	初音	松風	真木柱	竹河	花宴	蜻蛉	若菜上	少女	総角	明石	絵合
匂宮	夕霧	臘月夜	源氏	末摘花	浮舟	尼君	源氏	源氏	源氏	冷泉院	紫の上	源氏	玉鬘	藏人少将	藤壺中宮	弁のおもと	紫の上	源氏	大君	源氏	平内侍



130 秋はて、きりのまかきにむすほ、れありかなきかとうつるあさかほ  
 131 ぶりにけるかしらの雪を見る人もおとらすぬらすあさの袖かな  
 132 恋わひてなく音にまかふうら浪はおもふかたより風や吹らむ  
 133 過にしもけふわかる、も二道にゆくかたしらぬ秋の暮かな  
 134 なくくもはねうちきする君なくはわれそ巢もりになるへかりける  
 135 しつみしもわすれぬ物をこりすまに身もなけつへきやとの藤なみ  
 136 みなれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけはなれなむ  
 137 あかねさす光は空にくもらぬをなとてみゆきにめをきらしけん  
 138 千尋ともいかてかしらんさためなくみちひる塩ののつけからぬに  
 139 吹まよふ深山おろしに夢さめてなみたもよほす瀧の音かな  
 140 おほかたは思ひすて、し世なれともあふひはなをやつみおかすへき  
 141 をしか暗秋の山里いかならん小萩かつゆのか、る夕くれ  
 142 そのかみをけふはかけしとしのふれと心のうちに物ぞかなしき  
 143 みつせ川わたらぬさきにかてなをなみたのみのあはときえなん  
 144 むらさきにかことはかけん藤の花まつよりすきてうれたけれとも  
 145 あさけれと石まの水はすみはて、宿もる君やかけはなるへき

146 海にます神のたすけにか、らすはしほのやほあひにさすらへなまし  
 147 雪ふかきのへのわかなも今よりは君かためにそとしもつむへき  
 148 うき身よにやかて消なは尋ても草の原をはとほしとや思ふ  
 149 しなてるやにほのみつうみにこく舟のまほならねともあひみし物を  
 150 うちすて、たつもかなしき浦なみのなこりいかと思ひやる哉  
 151 かねの上の山もたつねし舟のうちにをひせぬ名をはこ、にのこさん  
 152 見し人のかたしるならは身(。に)染て恋しきせ、のなて物にせん

19ウ 19オ 18ウ 18オ 17ウ 17オ

みをの<sup>㊦</sup>園〔長斐阿〕—みほに〔河〕—み  
 をに〔陽保〕

朝顔	朝顔の宮
末摘花	源氏
須磨	源氏
夕顔	源氏
橋姫	中の君
若菜上	源氏
宿木	中の君
行幸	源氏
葵	葵の上
若紫	源氏
幻	源氏
椎本	匂宮
賢木	六条御息所
真木柱	玉鬘
藤裏葉	頭中将
真木柱	中将のおも
と	
明石	源氏
手習	浮舟
花宴	臘月夜
早蕨	薫
明石	源氏
胡蝶	女房
東屋	薫

\*「名をは」の「は」、下の字を刷り消した上に書く  
 \*「染て」独自異文。「そへて」の誤写か



174 山里の松のかけにもかくはかり身にしむ秋の風はなかりき  
 175 数ならぬみくりや河のすちなれはうきにしもかくねをと、めけん  
 176 光ありと見し夕かほのうは露はたそかれ時のそらめなりけり  
 177 ゆくさきも見えぬ浪路に舟出して風にまかする身こそうきたれ  
 178 初草のわか葉のうへをみつるより旅ねの袖も露そかはかね  
 179 うちつけのわかれをおしむかことにておもはんかたにしたひやはせぬ  
 180 もろかつら落葉を何にひろひけん名はむつまじきかさしなれとも  
 181 なく／＼もかへりにしかなかりのよはいつくもつみの常せならぬに  
 182 山里のあわれしらるゝ声／＼にとりあつめたる朝ほらけ哉  
 183 雪ふかきおしほの山にたつきしの古きあとをもけふはたつねよ  
 184 さしとむる葎やしけきあつまやのあまりほとふるあまそ、きかな  
 185 わかれにしけふはくれとも見(。し)人に行あふほとはいつとたのまん  
 186 今とはとであらしやはてんなき人のこゝろと、めし春のかきねを  
 187 浪こゆる比ともしらす末の松まつらんとのみ思ひけるかな  
 188 紅のなみたにふかき袖の色をあさみとりとやいひしほるへき  
 189 君かためおれるかさしはむらさきの雲にをとらぬ花のけしきか  
 190 花といへは名こそあたなれ女郎花なへての露にみたれやはする  
 191 おなしえをわきて染ける山姫にいつれかふかき色とは、や  
 192 秋はつる野辺のけしきもしの薄ほのめく風につけてこそしれ  
 193 をみなへししほれそまさる朝露のいかにおきける名残なるらむ  
 194 秋の夜の月毛の駒よ我こふる雲井にかけれ時のまもみむ  
 195 霞たに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひなまし  
 196 たち花のかほるあたりはほと、きす心してこそなくへかりけれ

25 才

24 ウ

23 ウ

23 才

22 ウ

雲井に☒肖―雲ゐを(河) 大横陽池三

おもはん☒大家池肖三―おもはぬ(河) 横平  
 いつも☒三―いつも大池肖(河) (別) 幻  
 \*「常せ」(「せ」は平仮名)は独自異文。「常世」の誤写か

蜻蛉	梅枝	明石	宿木	宿木	総角	蜻蛉	宿木	少女	浮舟	幻	賢木	東屋	行幸	総角	宿木	宿木	玉鬘	夕顔	玉鬘	玉鬘	宿木	
匂宮	弁少将	源氏	落葉の宮	中の君	薫	と	中将のおも	夕霧	薫	源氏	源氏	薫	冷泉院	薫	柏木	源氏	源氏	玉鬘	夕顔	玉鬘	玉鬘	中の君



219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240

なれこそは岩もるあるし見(。し)人も行衛はしるや宿のまし水  
 咲花にうつるてふなはつ、めとも折らて過うき今朝のあさかほ  
 うきふしもわすれすなからくれ竹のこはすてかたき物にそありける  
 女郎花さけを大野をふせきつ、心せはくやしめをゆふらむ

28才

人も<sup>㊦</sup>一人の團(河)(別)

藤裏葉 夕霧

いはけなきたつの一声き、しよりあしまになつむ舟そえならぬ  
 うきことをおもひさはけはさまくにくゆる煙そいと、たちそふ  
 見し人の煙を雲となかむれは夕の空もむつまじきかな

28ウ

この世に<sup>㊦</sup>團—この身に(七官尾為平大鳳)  
 (別)—この身は(御)  
 \*「さけを」独自異文。「さける」の誤写か  
 \*「を」は擦り消されて傷んだ料紙の上に紙  
 片を貼付して書く。

若紫 源氏

みてもまたあふ夜まれなる夢の中にやかてまきる、わか身ともかな  
 たき、こるおもひはけふをはしめてこの世にねかふのりそはるけき

29才

この世に<sup>㊦</sup>團—この身に(七官尾為平大鳳)  
 (別)—この身は(御)

紅葉賀 源氏

かくれなき物としるく夏衣きたるをうすき心とそみる  
 心ありて風のにほはすその、梅にまつ鶯のとはすやあるへき  
 袖の香をよそふるからに橘の身さへはかなくなりもこそすれ  
 朝日さす光をみても玉さ、の葉分の霜をけさすもあらなん  
 初雁は恋しき人のつれなれや旅の空とふ声のかなしき

29ウ

つれ<sup>㊦</sup>—ら團(河)(別)

紅梅 源氏

うきめ見しそのおりよりもけふはまた過にしかたにかへるなみたか  
 あはれとて手をゆるせかしきしにを君にまかするわか身とならば  
 山おろしにたえぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわか涙かな

30才

\*「、」虫孔。

橘姫 源氏

よをいとふ心は山にかよへともやえたつ雲を君やへたつる  
 舟人もたれをこふとかおほ嶋のうらかなしけに声のきこゆる

30ウ

玉鬘 玉鬘の乳母  
 の姉娘



242	241	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262				
たち花のかほりし袖によそふれはかはれる身ともおもほえぬかな 木からしの吹につけつ、まちしまにおほつかなさのころもへにけり	ことにおいて、いはぬをいふにまさるとは人に恥たるけしきをそみる	色まさる籬のきくもおり／＼に袖うちかけし秋をこふらし 恋わたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちを尋ねきつらん 行て見てあすもさねこん中／＼にをちかた人は心をくとも 古きあとをたつぬれとけになかりけりこのよにかゝるおやのこゝろは ひとつまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれしと思ふ 今さらにいかならん世かわか竹のおひはめけんねをはたつねん 待人もあらしと思ふ山里の梢をみつゝ、なをそすきうき 見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香そする あま衣かはれる身にやありしよのかたみの袖をかけてしのはん	かればつる野辺をうしとやなき人の秋にこゝろをと、めざりけむ なへて世のあわれ斗をとふからにちかひしことを神やいさめん よそへつゝ、みるに心をなくさまで露けさまさる撫子のほな 露けさのむかしにくたる旅衣たみの、しまのなにはかくれす たちとまり霧のまかきの過うくは草の戸さしにさはりしもせし ななき世をたのみても猶かなしきはた、あすしらぬ命なりけり 鳥の音もきこへぬ山とおもひしをよのうきことは尋きにけり 色かはる袖を露のやとりにてわか身そさらにをき所なき いける世のわかれをしらて契つ、命を人にかきりけるかな 人しれす神のゆるしを待しまにこゝらつれなきよをすくすかな	つげつ、 <b>園</b> (河)〔陽国〕―つけても〔御 相〕、ころも <b>園</b> (御陽国)―程も(河)〔相〕 いはぬを <b>園</b> 横梅池三〔麦阿〕―いはぬも(河) 〔保飯〕大為陽旨	賢木 臘月夜	源氏	藤裏葉 源氏	玉鬘 源氏	薄雲 源氏	蛭 玉鬘	紅葉賀 源氏	胡蝶 玉鬘	手習 中将	早蕨 中の君	手習 浮舟	御法 秋好中宮	朝顔 朝顔の宮	紅葉賀 源氏	濡標 源氏	若紫 忍び所の女	浮舟 匂宮	総角 大君	椎本 大君	須磨 源氏	朝顔 源氏
		31ウ	31オ	31ウ	31ウ	32オ	32ウ	32オ	32オ	32オ	32オ	32ウ	32ウ	32ウ	32ウ	32ウ	32ウ	32ウ	32ウ	33オ	33オ				
		かたみの <b>園</b> (河)〔宮保国桃〕―かたみに <b>園</b> 〔陽池阿〕	*「おひはめ」独自異文。「おひはしめ」の誤写か	*「くたる」独自異文。「くたる」の誤写か	つれなき <b>園</b> 御大池冬耕首三(河)〔陽〕―つね なき〔保坂平園〕―つれなく為																				

263 身をかねてのちもまぢまよ此よにておやをわする、ためしありやと  
 264 こりすまのうらのみるめもゆかしきを塩やくあまやいか、おもはん  
 265 なか道をへたつるほどはなれともこゝろみたる、今朝のあわ雪  
 266 うきしまをこきはなれてもゆくかたやいつくとまりとしらすもある哉  
 267 橋のこしまは色もかはらしをこの浮舟そ行衛しられぬ  
 268 君なくて岩のかけ道絶しより松の雪をも何とかは見る  
 269 日影にもしるかりけめや乙女子かあまのみ袖にかけし心を  
 270 夕まくれほのかに花の色をみて今朝は霞のたちそわつらふ  
 271 松嶋のあまのぬれ衣なれぬとてぬきあへつてふなをたゝめやは  
 272 ほに出ぬ物思ふらししのすゝきまねく袂の露しけくして  
 273 かへりてはかことやせましよせたりし名残に袖のひかたかりしを  
 274 うみ松や時そともなき影にゐて何のあやめもいかにわくらん  
 275 萬代をかけて匂はむ花なれはけふをもあかぬ色とこそ見れ  
 276 大かたに荻の葉する風のおともうき身ひとつにしむ心ちして  
 277 思ふとちなひくかたにはあらずともわれせけふりにさきたちなまし  
 278 よるなみにたちかさねたる旅衣しほとけしとや人のいとほむ  
 279 なく声もきこえぬ虫のおもひたに人のけつにはきゆる物かは  
 280 二もとの杉のたちとを尋ねすは古川のへに君をみましや  
 281 なる、身をうらみんよりはまつ嶋のあまの衣にたちやかえまし

33ウ	みるめも	飯	朝顔	源氏
	横肖三(河)〔別〕		須磨	源氏
	みるめの大池			
34ウ	色も		若菜上	源氏
	〔麦〕		王鬘	源氏
	いろいろは園(河)		浮舟	兵部の君
	〔宮陽国桃〕		椎本	大君
34オ	*「み袖」		少女	夕霧
	独自異文。「は袖」の誤写か。			
	心を		若菜	源氏
	〔讚陽保〕		夕霧	夕霧
	一心は園(河)			
	〔国麦阿〕			
	ぬきあへつてふ			
	ぬきかへつてふ園(河)			
	〔御陽保〕			
	ぬきかへぬといふ			
	〔国〕			
	ぬきかへんてふ			
	〔麦阿〕			
34ウ	いかに		宿木	匂宮
	大家横池肖三		明石	源氏
	いかに、(河)		漣標	源氏
	いかに			
	て平			
35オ	宿木		今上帝	
	野分		明石の君	
	漣標		紫上	
	よるなみに		明石君	
	〔御〕			
	よるなみの(七宮平)			
35ウ	たちとを		蛩	
	園(保国麦阿)		玉鬘	
	一木たちを(河)		右近	
	〔陽〕		兵部卿宮	
	うらみん		夕霧	
	肖(河)〔別〕			
	うらむる大横池三		雲井雁	



327 326 325 324 323 322 321 320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307 306 305 304

年くれて岩井の水もこほりとちみし人かけのあせもゆくかな  
 見てもおもふみぬはたいかになけくらんこやよの人のまとふてふやみ  
 いと、しく虫のしけき浅茅生に露をささふる雲の上人  
 ありふれはうれしきせにもあひけるを身をうち川になけてましかは  
 御祓川せ、にいたさんなて物を身にそふ影とたれかたのまむ  
 あらたちし浪に心はさはかねとよせけむ磯をいか、うらみん  
 すみよしのまつこそ物はかなしけれ神代のことをかけておもへは  
 ふちに身をなけつへしやと此春は花のあたりをたちささてみよ  
 たちぬる、人しもあらしあつま屋にうたてもか、る雨そ、きかな  
 いにしへの秋のゆふへの恋しきに今はと見えしあけくれの夢  
 ゆくとくとせきとめかたき涙をやたえぬし水と人はみるらむ  
 小松原すゑのよはひにひかれてや野辺のわかかなも年をつむへき  
 めつらしや花のねくらに木つたひて谷の古巣をとへる鶯

いつれとかわきてなかめんきへかへる露も草葉のうへとみぬよを  
 古郷をいつれの春かゆきてみんうらやましきは帰るかりかね  
 よにしらすまとふへきかなさきにたつなみたもみちをかきくらしつ、  
 ふりみたれひまなき空にな。(き) 人のあまかけるらんやとそかなしき  
 ふたかたにいひもてゆけは玉くしけ我身はなれぬかけこなりけり  
 身をなけんふちもまことのふちならてかけしやさらにこりすまの波  
 花の香にさそはれぬへき身なりせは風の便をすくさましやは  
 大かたの秋のわかれもかなしきになくねなそへそ野辺の松虫

あられふる深山のさとは朝夕になかむる空もかきくらしつ、  
 風ふけはまつそみたる、色かはるあさちる露にかゝるさ、かに  
 しほく／＼とまつそなかる、かりそめのあさ夕きりもはれぬ山里

38ウ 39オ 39ウ 40オ 40ウ 41オ

賢木 王命婦  
 紅葉賀 王命婦  
 桐壺 更衣母君  
 早殿 大輔の君  
 東屋 中の君  
 紅葉賀 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 胡蝶 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 御法 夕霧  
 閑屋 空蟬  
 若菜上 源氏  
 初音 明石の君  
 とへる 慈横肖三(宮風) 〔麦阿〕 ーとつる  
 (御大飯尾) (大保) 池

なくねなそへそ 〔御〕 ーねな鳴そへそ  
 (河) (陽相国)

\*この下句は本来は松風(38番歌)のもの。

賢木 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 桐壺 源氏  
 早殿 源氏  
 東屋 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 胡蝶 源氏  
 紅葉賀 源氏  
 御法 源氏  
 閑屋 源氏  
 若菜上 源氏  
 初音 源氏  
 夕霧 源氏  
 須磨 源氏  
 浮舟 源氏  
 浮舟 源氏  
 若菜上 源氏  
 行幸 源氏  
 若菜上 源氏  
 紅梅 源氏  
 賢木 源氏  
 総角 源氏  
 賢木 源氏  
 明石 源氏

350 349 348 347 346 345 344 343 342 341 340 339 338 337 336 335 334 333 332 331 330 329 328

おほそらの風にちれとも桜花おのか物とそかきつめてみる  
 身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちをわすれしもせず  
 かすならは身にしられまし世のうきを人のためにもぬらす袖かな  
 おりからやあわれもしらん梅のはなた、かはかりにうつりしもせし  
 打すて、つかひさりにし水鳥のかりのこのよにたちおくれけん  
 よそにてはもき木なりとやさたむらん下に匂へるむめのはつ花

常世出で旅の空なるかりかねもつらにおくれぬほとそなくさむ  
 月影はおなし雲井に見えなからわかやとからの秋そかはれる  
 世をわかれ入なん道はおくるともおなし所を君もたつねよ  
 小塩山みゆきつもれる松原にけふはかりなるあとやなからむ  
 誰れかまたこゝろをしりて住よしの神代をへたる松にこととふ  
 わきてこの暮こそ袖は露け、れ物おもふ秋はあまたへぬれと  
 めにちかくうつれはかはる世中を行すへとをくたのみける哉  
 朝霧のはれまもまたぬけしきにてはなに心をとめぬとそみる  
 心をかなげかさらまし命のみさためなきよとおもはましかは  
 かた／＼にくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまとは、  
 露しけきむくらの宿に古への秋にかはらぬむしの声かな  
 ほと、きす君につてなん古里の花たちはなは今そさかりと  
 むすひける契ことなるしたひもをた、一すちにうらみやはする  
 時ならてけささく花は夏の雨にしほれにけらし匂ふほとなく  
 うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花のちりけむ  
 なき人は影たに見えずつれなくて心をやれるいさらるの水  
 おほつかな誰にとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身そ

41ウ	竹河 童	竹河	41ウ	おほそらの風にちれとも桜花おのか物とそかきつめてみる
42オ	竹河 薫	竹河	42オ	身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちをわすれしもせず
42ウ	橋姫 女房	竹河	42ウ	かすならは身にしられまし世のうきを人のためにもぬらす袖かな
43ウ	夕霧 藤典侍	夕霧	43ウ	おりからやあわれもしらん梅のはなた、かはかりにうつりしもせし
43オ	夕霧 一条御息所	横笛	43オ	打すて、つかひさりにし水鳥のかりのこのよにたちおくれけん
44オ	夕霧 薫	宿木	44オ	よそにてはもき木なりとやさたむらん下に匂へるむめのはつ花
	須磨 右近将監	須磨		常世出で旅の空なるかりかねもつらにおくれぬほとそなくさむ
	鈴虫 源氏	鈴虫		月影はおなし雲井に見えなからわかやとからの秋そかはれる
	行幸 源氏	行幸		世をわかれ入なん道はおくるともおなし所を君もたつねよ
	葵 源氏	葵		小塩山みゆきつもれる松原にけふはかりなるあとやなからむ
	若菜上 紫の上	若菜上		誰れかまたこゝろをしりて住よしの神代をへたる松にこととふ
	夕顔 中將の君	夕顔		わきてこの暮こそ袖は露け、れ物おもふ秋はあまたへぬれと
	浮舟 浮舟	浮舟		めにちかくうつれはかはる世中を行すへとをくたのみける哉
	総角 大君	総角		朝霧のはれまもまたぬけしきにてはなに心をとめぬとそみる
	横笛 一条御息所	横笛		心をかなげかさらまし命のみさためなきよとおもはましかは
	幻 夕霧	幻		かた／＼にくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまとは、
	宿木 薫	宿木		露しけきむくらの宿に古への秋にかはらぬむしの声かな
	賢木 源氏	賢木		ほと、きす君につてなん古里の花たちはなは今そさかりと
	柏木 弁の君	柏木		むすひける契ことなるしたひもをた、一すちにうらみやはする
	藤裏葉 雲井雁	藤裏葉		時ならてけささく花は夏の雨にしほれにけらし匂ふほとなく
	句宮 薫	句宮		うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花のちりけむ

\*「はても」の「て」、下の文字を擦り消した上に書く。



- 375 かきつめてみるもかひなしもしほ草おなし雲井のけふりとをなれ
- 376 柏木にはもりの神はまさすとも人ならずへきやとのこすへか  
植てみし花のあるしもなきやとにしらすかほにてきゐる鶯  
宮城野の露ふきむすふ風の音にこはきかもとおもひこそやれ  
わかれしにかなしきことはつきにしをまたそ此世のうきはまされる  
うらなくもおもひけるかなちきりしをまつより波はこへしものそと  
色も香もうつるはかりにこの春はな咲やとをかれすもあらなん  
恋しさのなくさめかたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな  
なかもやるそなたの雲もみえぬまで空さへくる、ころのわひしさ  
久かたの光にちかき名のみして見るめはあまのすさひなれとも  
七夕のあふせは雲のよそにみてわかれの庭に露そをきそふ  
乙女子か神さひぬらしあまつ袖ふるき世のともよはひへぬれば
- 387 としへつるとまやもあれてうき浪のかへるかたにや身をたへまし
- 388 命こそたゆともたえめさためなき世のつねならぬ中のちきりを  
いつそやも花のさかりにひとめみし木のもとさへや秋はさひしき  
なてしこのとこなつかしき色をははもとのかきねを人やたつねむ  
まこと。(。に)や花のあたりはたちうきとかすむる空のけしきをもみむ  
ひとりあてななめしよりはあまのすむかたをかきてそ見るへかりける
- 392 49ウ
- 393 誰により世をうみ山にゆきめぐりたえぬ涙にうきしつむ身そ  
ふかき夜のあはれをしるも入月のおほろけならぬ契とおもふ

かひなし	七宮尾平大鳳	〔保飯〕	―かな	幻	源氏
しき〔為〕	〔御陽斐阿〕				
こすへか	定大陽肖三	しつつか	〔河〕	〔別〕	
榊しつへ	〔こすゑ〕	か横			
ふき	〔河〕	〔陽国斐〕	ひひき	〔御〕	
幻					源氏
桐壺					桐壺院
須磨					源氏
明石					紫上
梅枝					源氏
夕霧					落葉の宮
浮舟					匂宮
松風					源氏
幻					源氏
少女					源氏
尾	〔別〕				
乙女子か	〔七〕	―おとめ子も	〔御宮大鳳〕		
誤写か					
ちきりを	〔別〕	―ちきりそ	〔河〕		
若菜上					源氏
総角					宰相中将
常夏					源氏
若紫					尼君
絵合					紫の上
ななめしよりは	池肖三	―なげきしよりは			
〔河〕	御大横神陽	かきてそ	〔御肖〕	かくて	
そ	〔河〕	大横神陽池三			
花宴					源氏
澤標					源氏







459 458 457 456 455 454 453 452 451 450 449 448 447 446 445 444 443 442 441 440 439 438 437

せくからにあさくそ見えむ山川のなかれての名をつゝみはてすは  
 あれはつるくち木のもとをよとり木とおもひをきけるほとのかなしさ  
 影をのみみたらし河のつれなきに身のうきほとそいと、しらるゝ  
 さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはきはする  
 ひたふるにうれしからまし世中にあらぬ所とおもはましかは  
 われのみやうき世をしれるためしにてぬれそふ袖の名をくたすへき  
 二葉よりなたゝる園のきくなればあさき色わく露もなかりき  
 鈴むしの声のかきりをつくしてもななき夜あかすふる涙かな  
 はかり。(なき) 千尋のそこのみるふさのおひゆく末は我のみそみん  
 あめにますとよをか姫の宮人もわか心さすしめをわするな  
 藤なみのうちすきかたく見えつるは松こそやとのしるしなりけれ  
 身をなけむ涙の川にしつみても恋しきせゝにわすれしもせし  
 あまた年けふあらためし色衣きては涙そふる心ちする  
 笛のねよむかしのこともしのはれて帰しほとも袖そぬれにし  
 つれなさは浮世の常になりゆくをわすれぬ人やひとりことなる  
 いつかたの雲路にわれもまよひなん月のみるらむこともはつかし  
 あまかつむなげ木の中にしはたれていつまですまの浦と詠ん

57ウ  
 56ウ  
 56オ  
 57オ  
 (別)池  
 浦と大横池三―まとひなむ(河)  
 三  
 \*「しれまし」独自異文。「しなまし」の誤写  
 やとる大横池三(宮国桃)―すめる(河)  
 (陽保阿)肖  
 夕霧  
 宿木  
 葵  
 若紫  
 東屋  
 夕霧  
 藤葉菜  
 桐壺  
 葵  
 少女  
 蓬生  
 早蕨  
 葵  
 手習  
 梅枝  
 須磨  
 (別)池  
 浦と大横池三―まとひなむ(河)  
 三  
 \*「しれまし」独自異文。「しなまし」の誤写  
 やとる大横池三(宮国桃)―すめる(河)  
 (陽保阿)肖  
 夕霧  
 宿木  
 葵  
 若紫  
 東屋  
 夕霧  
 藤葉菜  
 桐壺  
 葵  
 少女  
 蓬生  
 早蕨  
 葵  
 手習  
 梅枝  
 須磨  
 (別)池  
 浦と大横池三―まとひなむ(河)  
 三  
 \*「しれまし」独自異文。「しなまし」の誤写  
 やとる大横池三(宮国桃)―すめる(河)  
 (陽保阿)肖

夕霧  
 夕霧  
 六条御息所  
 北山の僧都  
 浮舟  
 落葉の宮  
 大輔の乳母  
 靱負命婦  
 源氏  
 源氏  
 源氏  
 薰  
 源氏  
 妹尼  
 夕霧  
 源氏  
 須磨  
 源氏  
 源氏  
 女三宮  
 空蟬  
 源氏  
 明石の君  
 夕霧  
 紫の上



485 ふる川の杉のもとたちしらねとも過にし人によそへとそみる  
 486 雪ふかき山のかけはし君ならてまたふみかよふあとをみぬかな  
 487 めつらしと古里人もまちそみむ花のにしきをきて帰る君  
 488 いきてまた逢みんことをいつとてかかきりもしらぬよを。(は)たのまん  
 489 君こふる涙はきはもなき物をけふをは何のはてといふらん  
 490 つてに見し宿の桜を此春はかすみへたてすおりてかさ、ん  
 491 のちにまたあひみむことをおもはなんこのよの夢にこゝろまとはて  
 492 よのつねの色ともみへす雲井まで立のほりける藤なみの花  
 493 62才  
 494 みや人は豊の明にいそくけふひかけもしらて暮しつる哉  
 495 おく山の松葉につもる雪とたにきえにし人をおもはましかは  
 496 露けさはむかしいまとおもほえずおほかた秋のよこそつらけれ  
 497 老の浪かひある浦にたちいて、しほたる、あまをたれかとかめむ  
 498 つねなしとこゝら世を見るうきみに人のしかまてなげきやはする  
 499 身をかへて独かへれる山里にき、しににたる松風そふく  
 500 あひみすてしのふるころの涙をもなへての秋の時雨とやみる  
 501 やとり木と思ひ出すはこのもとの旅寝もいかにさひしからまし  
 502 国津かみ空にことはる中ならばなをさりことをまつやた、さん  
 503 なげきつ、我身はかくてすくせとやむねのあくへき時そともなく  
 入日さすみねにたなひく薄くもは物おもふ袖に色やまかへる

63才

62ウ

62才

西保——まつかに〔国〕、うらみとも〔西保〕 〔西保国言麦阿〕——うらみしも〔河〕〔大〕 *「みす」独自異文、「せす」の誤写か。 *117と重出歌 *198と重出歌 *783と重出歌	立のほりける〔池肖三〔保〕——たちのほりたる〔河〕〔宮陽国阿桃〕大横	つもる〔大池肖三〔横〕——とまる〔河〕〔陽保〕前	*「しか」独自異文、「しる」の誤写か 山里に〔大為肖〕ふるさとに〔御保冷大國〕 横氏陽池三——ふるさとに〔七〕 涙をも〔陽相国〕——涙をは〔河〕〔御〕、 秋の〔河〕〔別〕——そのの園	我身は〔相〕——わかよは〔河〕〔御陽国〕 色や〔園〕〔麦阿〕——いろそ〔河〕〔陽保坂〕
手習 妹尼	稚本 大君	梅枝 源氏	松風 明石の君	浮舟 浮舟
稚本 源氏	幻 中將の君	浮舟 句宮	宿木 紅梅大納言	御法 源氏
若菜上 明石の尼君	蜻蛉 薫	松風 明石の尼君	賢木 源氏	宿木 薫
賢木 秋好中宮	賢木 源氏	薄雲 源氏		

504 うき雲にしはしまかひし月影のすみはつるよそののとけかるへき  
 たつねゆくまほろしもかなつてにても玉のありかをそことしるへく  
 見し人は影もとまらぬ水の上に落そふ泪いと、せきあへす  
 袖ふれし人こそみえね花の香のそれかと匂ふ春の明ほの  
 今はとてもえむ煙もむすほ、れたへぬおもひのなをやのこらん  
 古里を峯の霞はへたつれとなかむる空はおなし雲井か  
 あしわかぬ浦にみるめはかくともこはたちなからかへる浪かは  
 けふさへやひく人もなきみかくれにおふるあやめのねのみなかれん  
 つれくともをしる雨のをやまねは袖さへいと、みかさまさりて  
 琴の音も月もえならぬ宿なからつれなき人をひきやとめける  
 513 512 511 510 509 508 507 506 505  
 515 514 見るほとそしはしなくさむめぐりあはん月の都ははるかなれとも  
 雲の上もなみたにくる、秋の月いかにすむらん浅生のやと  
 517 516 つれくとも我なきくらす夏の日をかこたましき虫の声かな  
 かこつへきゆへをしらねはおほつかないかななる草のゆかりなるらむ  
 君なくてちりつもりぬる床夏の露うちはらひいく夜ねぬらん  
 見し夢をあふよありやとなけくまにめさへあはてそころもへにける  
 中たえはかことやあふとあやうきに花田の帯はとりてたにみす  
 522 521 ひとりねは君もしりぬやつれくと思ひあかしの浦さひしさを  
 みし人も宿もけふりになりにしをなとて我身の消残りけん

63ウ	まかひし 国 まどひし 御 ーまよひし 七 松風 保冷大國	桐壺 手習 薫 手習 浮舟 柏木 須磨 源氏 若紫 源氏 蛭 源氏 浮舟 兵部卿宮 浮舟 殿上人	頭中将
64ウ	月も 大松池三 陽國 ー菊も 河 ー月 ーき くも 秀	須磨 源氏 桐壺 桐壺院	源氏
65ウ	あふと 御 おもふと 御 池 ーおもふと 河 氏 大横神陽三 帯は 横神陽池三 御 ーをひを大 河 氏 *「あやうき」独自異文、「あやうさ」の誤写か。	紅葉賀 源氏 筈木 源氏 葵 源氏 若紫 紫上 幻 源氏	源氏
65オ	くもる 國	明石 源氏 橋姫 八宮	源氏

国 宮横陽保妻阿

541 540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

541 大空をかよふまほろし夢にたに見えこぬ玉の行多たつねよ  
 540 あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすら袖の朽にけるかな  
 539 ことのねにひきとめらるゝつなてなはたゆたふ心きみしるらめや  
 538 をちこちの汀の浪はへたつともなを吹かよへ宇治の河風  
 537 それもかときさひらけたる初花にをとらぬ君かにはひをそみる  
 536 ふかき夜の月を哀とみぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬ  
 535 なつかしき色ともなしになに、このすへつむ花を袖にふれけむ  
 534 へたてなく蓮の宿をちきりても君かこゝろやすましとすらん  
 533 風にちる紅葉はかろし春の色を岩根の松にかけてこそみめ

68才 67ウ 67才 66ウ 66才

さほらざりけり 大横池三(保国) | なのみ  
 也けり肖(河) (陽麦阿)

こせり 大肖(陽) | せりも(河) (保) | こ  
 ほり池三 | こをり(横) | こほ(せ) | り前  
 \*「なくにして」独自異文。「なしにして」の  
 誤写か

汀の 大(河) (別)  
 をそ 大(御陽相) | とそ(河) (国)

かろし 大(讚陽保麦阿) | かるし横池肖 |  
 かなし | 三 | かな(ろ) | し平 | かけし(御宮大  
 鳳尾) | うへし(七) | うゑし(国)、岩根の  
 大(別) | 一つのは(河)、かけて 大(大)

夕顔 軒端菖  
 総角 薫  
 総角 薫  
 松風 左大弁  
 玉鬘 玉鬘の乳母  
 賢木 源氏  
 葵 源典侍  
 須磨 六条御息所  
 薄雲 明石の君  
 稚本 中の君  
 幻 源氏  
 夕顔 源氏  
 須磨 五節  
 稚本 匂宮  
 賢木 頭中将  
 手習 妹尼  
 末摘花 源氏  
 鈴虫 女三宮  
 少女 紫の上

565 564 563 562 561 560 559 558 557 556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546 545 544 543 542

暁の霜うちはらひなく千鳥ものおもふ人の心をやしる  
とけてねぬ寢覚さひしき冬の夜にむすほ、れつるゆめのみしかさ  
さきにたつ涙の川に身をなけは人にをくれぬ命ならまし  
うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山路におもひこそいれ  
とまる身も消しもおなし露のよに心をくらんほとそはかなき  
くやしくそつみおかしけるあふひ草神のゆるせるかさしならぬに  
から国に名を残しける人よりもゆくゑしられぬ家居をやせん  
なき玉そいと、かなしきねし床のあくかれかたき心ならひに  
なき人をしのふるよひのむらさめにぬれてやきつる山ほと、きす  
ひとりゐてこかる、むねのくるしきにおもひあまれるほのをとぞみし  
のほりにし嶺の煙にたちましろおもはぬかたになひかすも哉  
おりたちてくみはみねともわたる川人のせとはたちきらさりしを  
うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな  
ふかきよのあわれはかりはき、わけとことよりほかにえやはいひける  
朝日さす軒の垂水はとけなからなとかつら、のむすほ、る覽  
よりにこそそれかともみめたそからにほのくみつるはなの夕かほ  
数ならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらすきゆるは、木、  
よにしらぬ心ち杜すれ有明の月のゆくゑを空にまかへて  
ゆくすゑをみしかき物とおもひなはめのまへにたにそむかさならん  
いはぬをもいふにまさるとしりなからをしこめたるはくるしかりけり  
をくれしと空ゆく月をしとふかなつるにすむへきこのよならねは  
はれぬ夜の月まつ星を思ひやれおなし心になかめせずとも  
うき世にはあらぬ所をもとめても君かさかりをみるよしもかな  
あふことのをしへたてぬ中ならはひるまも何かまはゆからまし

71オ

70ウ

70オ

69ウ

69オ

68ウ

〔別〕—つけて（御七宮鳳尾）

しとふ<sup>■</sup>—したふ圍（河）〔別〕

わたる川<sup>■</sup>—わたり川圍（河）〔別〕

垂水は<sup>■</sup>圍（御）—たるひも（河）〔陽〕  
\*「たそから」独自異文。「たそかれ」の誤写

簪木	東屋	末摘花	総角	末摘花	総角	花宴	簪木	夕顔	末摘花	横笛	空蟬	真木柱	夕霧	真木柱	幻	葵	須磨	若菜下	葵	横笛	早蕨	朝顔	総角
女	中将の君	侍従	薫	源氏	匂宮	源氏	空蟬	源氏	源氏	落葉の宮	源氏	源氏	木工の君	源氏	源氏	源氏	源氏	柏木	源氏	女三宮	弁の尼	源氏	中の君







637 636 635 634 633 632 631 630 629 628 627 626 625 624 623 622 621 620 619 618 617 616 615 614 613

せん

おなしすにかへりしかひの見えぬかななる人か手にさるらん  
 なかきよのうらみを人にのこしてもかつはこゝろをあたとしらなむ  
 中絶む物ならなくにはし姫のかたしく袖やよはにぬらさむ  
 おちかへりえそしのはれぬ時鳥ほのかたらひしやとのかきねに  
 おほかたにきかまし物を蝸の声うらめしき秋のくれかな  
 夜るしほの螢をみてもかなしきはときそともなきおもひなりけり  
 旅衣うらかなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはず  
 よのつねにおもひやすらん露ふかき道のさ、はらわけてきつるも  
 雲の上に思ひのほれる心には千ひろのそこもはるかにそみる  
 たちよらんかけとたのみしるかもむなしきとこになりにけるかな  
 藤衣きしはきのふと思ふまにけふはみそきのせにかはるよを  
 里の名をわか身にしれは山城の宇治のわたりそいと、すみうき  
 また人になれける袖のうつり香をわか身にしめてうらみつる哉  
 かきりとてわかる、道のかなしきにかまほしきは命なりけり  
 たえはてぬ清水になとかなき人のおもかけをたにと、めさりけむ  
 山かつのかきねにおひしなしてしこのものねさしを誰かたつねむ  
 折て見はいと、匂もまさるやとすこしいろめけ梅のはつ花  
 風さはきむら雲まよふ夕にもわする、まなくわすられぬ君  
 いづくとか尋でおらんすみ染に霞こめたるやとのさくらを  
 なかめかるあまのすみかとみるからにまつしほたる、松かうら嶋  
 をくとみるほとそはかなきともすれば風にみたる、萩のうはつゆ  
 吹みたる風のけしきに女郎花しほれしぬへき心ちこそすれ  
 きえとまるほとやはふへきたまさかにはちすの露のかくるはかりを  
 つれなさを昔にこりぬこゝろこそ人のつらさにそへてつらけれ

80才 79ウ 79才 78ウ 78才 77ウ

こゝろを<sup>㊦</sup>心(河)〔別〕

かきねに<sup>㊦</sup>〔御〕―かきねを(河)〔陽〕

かきね<sup>㊦</sup>―かきほ<sup>㊦</sup>(河)〔別〕

朝顔	若菜下	野分	御法	賢木	権本	野分	竹河	常夏	東屋	桐壺	宿木	須磨	浮舟	少女	稚本	絵合	総角	明石	幻	宿木	花散里	総角	賢木	真木柱
源氏	紫の上	玉鬘	紫の上	源氏	中の君	夕霧	宰相の君	玉鬘	薫	桐壺更衣	匂宮	大宮	浮舟	朝顔の宮	薫	大貳典侍	匂宮	源氏	源氏	中の君	源氏	匂宮	藤壺中宮	源氏



682 681 680 679 678 677 676 675 674 673 672 671 670 669 668 667 666 665 664 663 662 661

あかぬ夜をへたつる中の衣手にかさねていと、見もしみや  
心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖  
いつくにか身をはすてんと白雲のか、らぬ山もなくくそゆく  
千世の春見るへき花と折をきてわか身そ雪ともくにわりぬる  
のほりぬる煙はそれとわかねともなへて雲井のあはれなるかな  
手を折て逢みしことをかさふればこれひとつやは君かうきふし  
年をへてまつしるしなきわかやとを花のたよりに過ぬはかりか  
かさしてもかつたとらる、草の名はかつらを折し人やしらん  
山の端の心もしらてゆく月はうはのそらにてかけやたえなん  
や、もせはきえをあらそふ露のよにをくれさきたつほとへすもかな  
かすならてなにはの事もかひなきになと身をつくし思ひそめけん  
むらさきのゆへに心をしめたれは淵に身なけんやはおしけき

何ゆへかよに数ならぬ身ひとつをうしとおもひかなしともきく  
から衣君か心のつられければ袂はかくそそほちつ、のみ  
伊勢人の浪の上こく小舟にもうきめはからてのらましものを  
きしかたをおもひ出るもはかなきを行すゑかけて何たのむらん  
君にかくひきとられぬるおひなれはかくて絶ぬる中とかこたん

たつかなき雲井にひとり音をそなくつはさならへし友を恋ひつ、  
いかてかくすたちけるそとおもふにもうき水鳥のちきり(。を)そしる  
ふか、らすうへはみゆれとせき川のしたのかよひはたゆる物かは  
もろともに置あし菊の朝露もひとり袂にか、る秋かな

おなしの、露にやつる、藤はかまあはれはかけよかことはかりも

85ウ 84ウ 84オ 83ウ

\*「あかぬ」独自異文。「あはぬ」の誤写か  
かそふれば(別) | かそふるに(河)  
ゆへに心を(保) | ゆへを心に(河) |  
ゆえを心に(陽麦阿)

ひきとられぬる(別) | 引とられける  
(河)、かこたん(大神池首三(河)(氏) | こ  
たえん横陽 | かこた(こたへ)ん(御)

朝露も(池首三(河)(御陽保飯) | しら露も  
大(麦阿)

末摘花	源氏	未摘花	夕霧	落葉の宮	夕霧	須磨	頭中將	須磨	頭中將	須磨	橋姫	大君	宿木	薫	源氏	幻	源氏	朝露も(池首三(河)(御陽保飯)   しら露も	大(麦阿)	藤袴	夕霧
-----	----	-----	----	------	----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	---	----	---	----	-------------------------	-------	----	----

700 あけぬよにやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかたらん

699 歎きわひ身をはすつともなきかけにうきななかさんことをこそおもへ

698 あさからぬしたのおもひをしらねはやなをか、り火の影はさはける

697 やしまもるくにつみ神も心あらはあかぬわかれの中をことわれ

696 おしからぬこのみなからもかきりとてたき、つきなんことのかなしさ

695 すかくれてかすにもあらぬかりのこをいつかたにかはとりかへすへき

694 浦人の塩くむ袖にくらへみよ浪路へたつる夜の衣を

693 木からしの吹にし山のふもとにはたちかへるへき陰たにそなき

692 わたつみにしなへうらふれひるのこのあした、さりし年はへにけり

691 なき人をしとふ心にまかせてもかけみぬ水のせにやまとはむ

690 あさきなをいひなかしける川くちはいか、もらし、関のあらかき

689 花の枝にいと、心をしむるかなつ、めと人のとかめむ香をは

688 橋のかをなつかしみほ、きすはなちる里をたつねてそとふ

687 なき人をしとふ心にまかせてもかけみぬ水のせにやまとはむ

686 あさきなをいひなかしける川くちはいか、もらし、関のあらかき

685 花の枝にいと、心をしむるかなつ、めと人のとかめむ香をは

684 古郷に見しよの友を恋侘てさへつることをたれかわくらん

683 かきりあはれはうす、み衣あさけれと涙そ袖を淵となしける

88オ

とりかへす 御横為池三(陽保長阿) | とり  
かくす(河) 麦 大肖

明石 明石君

87ウ

ふれ 大横池肖三(平尾) | うらさひ(御七  
大) 陽 | うらひれ(宮)、ひるのこの 團 | ひ  
るのこか(御七宮大尾) |、(ヒ) つるのこ  
の(平)

たちかへるへき | たちかくるへき 樽二肖  
三(河) (別) | 立かくすへき大

須磨 紫上  
手習 妹尼  
浮舟 浮舟  
薄雲 源氏  
賢木 源氏  
御法 紫の上

87オ

しなへ 大池 | しつみ(河) 横陽肖三、うら  
ふれ 大横池肖三(平尾) | うらさひ(御七  
大) 陽 | うらひれ(宮)、ひるのこの 團 | ひ  
るのこか(御七宮大尾) |、(ヒ) つるのこ  
の(平)

誤脱か

明石 源氏

86ウ

\*「香をは」独自異文。「香をはつ、めと」の  
誤脱か

\*「ほ、きす」独自異文。「ほと、きす」の誤  
写か

朝顔 源氏  
藤裏葉 雲井雁  
梅枝 源氏

86オ

花散里 源氏  
葵 源氏  
松風 明石の君  
明石 明石君  
幻 源氏  
螢 玉鬘

701 君にもし心たかは、松浦なるか、みの神をかけてちかはん  
 702 おきはらやのき葉の露にそほちつ、八重たつきりをわけそ行へき  
 703 かけきやは川瀬の浪も立かへり君かみそきのふちのやつれを

704 君かおるみねのわらひと見ましかはしられやせまし春のしるしも  
 705 きしとをくこきはなるらんあま舟に乗りをくれしといそかる、かな  
 706 こしかたもゆくゑもしらぬ沖に出てあわれいつくに君をこふらん

707 いもせ山ふかき道をは尋ずてをたえのはしにふみまどひける

708 つら、とちこまふみしたく山川をしるへしかてらまつやわたらん  
 709 おもひあまり昔のあとをたつぬれと親にそむけるこそたくひなき  
 710 心もて草のやとりをいとへともなを鈴むしの声そふりせぬ  
 711 さもこそはよるへの水に。(み)くさるめけふのかさしよなさへわする、  
 712 藤衣露けき秋のやまひとは鹿のなく声にねをそそへつる  
 713 さ、わけは人やとかめんいつとなくこまなつくめる杜の木かくれ  
 714 朝ほらけ家路もみへす尋ねこし横のお山はきりこめてけり  
 715 さしなから昔を今につたふれば玉のおくしそ神さひにける  
 716 かきりとてわすれかたきをわする、もこやよになひく心なるらん  
 717 よのつねの垣根に匂ふ花ならば心のま、に折て見ましを  
 718 夕霧に袖ぬらせとや日くらしのなくをきく／＼おきてゆくらん  
 719 あふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことにかわらさらなん  
 720 はかなくてうわの空にそきへぬへき風にた、よふ春のあわ雪  
 721 なき物に身をも人をもおもひつ、捨てしよをそさらにすてつる  
 722 山姫のそむる心はわかねともうつろふかたやふかきなるらん  
 723 くみそめてくやしとき、し山の井のあさきながらやかけをみすへき

701	90ウ	みすへき 栴肖(河) — 見るへき御大横池三	玉鬘	大夫の監
702	90オ	句ふ 園(宮国桃) — さける(河) (陽保阿)	夕霧	夕霧
703	90ウ	立かへり 園(御大) (陽国) — 立かはり(七 官尾鳳) (讚保麦阿)	少女	源氏
704	88ウ	いつくに 大横肖三 — いつこと池(別) — いつくと(河)	玉鬘	玉鬘の乳母
705	89オ	まどひける 御池肖三 — まどひけるよ(尾平 大鳳) — まよひけるよ(宮) 大鎮	藤袴	柏木
706	89ウ	椎本	薫	
707	89オ	蛭	源氏	
708	89ウ	鈴虫	源氏	
709	89ウ	幻	中将の君	
710	89ウ	夕霧	小少将	
711	89ウ	紅葉賀	源氏	
712	89ウ	橘姫	薫	
713	89ウ	若菜上	秋好中宮	
714	89ウ	梅枝	雲井雁	
715	89ウ	若菜下	薫	
716	89ウ	宿木	女三宮	
717	89ウ	明石	源氏	
718	89ウ	若菜上	女三宮	
719	89ウ	手習	浮舟	
720	89ウ	総角	大君	
721	89ウ	尼君	尼君	

724 そむく世のうしろめたくはざりかたきほたしをしゐて影なはなれそ  
 夕霧のはるゝ気色もまたみぬにいふせさそふるよひの雨かな  
 725 むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあけすは  
 726 竹河のはし打出し一ふしにふかき心の底はしりきや  
 727 木からしに吹あはすめる笛の音をひきとゝむへきことの葉そなき  
 728 月のすむ雲井をかけてしとふともこの世のやみになをやまとはん  
 729 見し人の雨となりにし雲井さへいとゝしくれにかきくらすころ  
 730 つゝむめる名やもれ出んひきかはしかくほころふる中の衣に  
 731 水まさるをちの里人いかならむはれぬなかめにかきくらすころ  
 732 ねはみねとあわれと所思ふむさし野ゝ露わけ侘る草のゆかりを  
 733 身をなけし涙の川のはやきせをしからみかけて誰かとゝめし  
 734 かのきしに心よりにしあま舟のそむきしかたに漕かへるかな  
 735 かさしける心そあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを  
 736 うちきらし朝くもりせしみゆきにはさやかに空の光やほみし  
 737 乙女子かあとにとおもへは榊葉のかをなつかしみとめてこそをれ  
 738 契りおかんこのよならでも蓮葉に玉る露のこゝろへたつな  
 739 松嶋のあまのとまやもいかならんすまの浦人しほたるゝころ  
 740 ありし世の名残たになきうらしまにたちよる浪のめつらしきかな  
 741 つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲井に人を見るにつけても  
 742 遠近もしらぬ雲井になかめ侘かすめし宿の梢をそとふ  
 743

91オ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
91オ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
91ウ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
91オ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
92オ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
92ウ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国
93オ	若菜上 紫の上	若菜下 源氏	須磨 源氏	賢木 源氏	行幸 玉鬘	葵 源氏	松風 明石の尼君	手習 浮舟	若紫 源氏	浮舟 薫	紅葉賀 頭中將	葵 源氏	賢木 源氏	籬木 女	竹河 薫	桐壺 左大臣	しりきや 西保国	しりきや 西保国

744 人めなくあれたる宿はたち花の花こそ軒のつまとなりけれ  
 745 あさみとり若葉の菊を露にてもこきむらさきの色とかけきや  
 746 さ、かにのふるまひしるき夕暮にひるますくせといふかあやなさ  
 747 はつ草のおひ行すへもしらぬまにいかてか露のきえむとすらん  
 748 月のすむ川のおちなる里なれはかつらの影はのとけかるらん  
 749 数ならはいとひもせまし長月に命をかくるほとそはかなき  
 750 おもふらむ心のほとややよいかにまたみぬ人の聞かなやまん  
 751 わりなしやつよきによらんかちまけを心ひとつにいか、まかする

752 かわらしと契りしことをたのみにて松のひ、きにねをそへしかな  
 753 うはそくかお。(こ)なふ道をしるへにてこむ世もふかき契たかふな

754 袖ぬる、露のゆかりと思ふにもなをうとまれぬやまと撫子  
 755 里わかぬ影をはみれと行月のいるさの山をたれかたつぬる  
 756 なけきつ、明石の浦にあさ霧のたつやと人をおもひやるかな  
 757 山さくらにはふあたりに尋来ておなしかさしを折てける哉  
 758 あらためて何かは見えん人の上にか、りととき、しこ、ろかはりを  
 759 なかむれは山より出て行月もよにすみわひて山にこそいれ  
 760 風にちることはよのつね枝なからうつろふ花をた、にしもみし

761 萩の葉に露ふきむすふ秋風も夕にわきて身にはしみける  
 762 きえぬまにかれぬる花のはかなさにおくる、露はなをそまたれる  
 763 かきくらしはれせぬみねの雨雲にうきてよをふる身をもなさはや  
 764 をひそめし根もふかけれはたくまの松に小まつの千代をならへん

93ウ	あれたる文圍(御)―あれ行(河)(陽)	花散里 麗景殿女御
94ウ	たかふな文圍―たえすな(河)―たへすな 〔別〕	夕顔 明石の君 源氏
95オ	*〔四〕虫損。 ことは文圍(別)―花は(河)、花を文圍(大西保国言)―花は(麦阿)―いろを(河)、みし文圍(別)―みす(河)	紅葉賀 藤壺中宮 末摘花 源氏 明石 源氏 椎本 匂宮 朝顔 朝顔の宮 早蕨 中の君 竹河 艶黒の中の君
96オ	身をも文圍池榊三(七尾静前大風)(宮国)―身とも(御)(陽麦桃)―平肖―身と(お)も横	薄雲 源氏 蜻蛉 薫 宿木 中の君 浮舟 浮舟



- 765 のほりにし雲井なからもかへりみよ我秋はてぬつねならぬよに
- 766 水鶏の青羽は色もかはらぬを萩の下こそけしきことなれ
- 767 あさみにや人はをりたつ我かたは身もそほつまでふかき恋路を  
さよ衣きてなれきとはいはすともかことはかりはかけすしもあらし
- 768 心ありて風をよくめる花の木にとりあへぬまでふきやよるへき  
こてふにもさそはれなまし心ありてやえ山吹をへたてさりせは  
花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん  
はふりこかゆふうちまかひおく霜はけにいちしるき神のしるしか  
秋はて、さひしさまさるこのもとを吹なつくしそ嶺の松風
- 773 あたらしき年ともいはすふるものはふりぬる人の涙成けり  
心からとこよをすて、なく雁を雲のよそにも思ひけるかな  
あたしの、風になひく女郎花我しめゆかんどとをくとも
- 774 夏衣たちかへてけるけふはかりふるき思ひもす、みやはせぬ
- 775 玉しめをつれなき袖にと、めおきてわか心からまとはる、かな  
行衛なき空の煙となりぬともおもふあたりをたちははなれし  
おもはずにいての中道へたつともいはてそ恋る山吹のはな  
いつこより秋は行けん山里の紅葉のかけはすきうきものを  
心から春待そのはわか宿の紅葉を風につてにたにみよ

98 才	97 ウ	97 才	96 ウ	96 ウ
	よそのも <sup>文</sup> 圍(御)―よそとも(河)(陽) *「ゆかん」独自異文、「ゆはん」の誤写か。 道 <sup>文</sup> 圍(河) (池桃) ―里(宮陽保国阿) ふるき思ひも <sup>文</sup> 大肖三(陽飯)―ふかき思ひ も池(宮尾為平大風)(保)―深き心(七)― ふるきおもひを(御)―ふるきおもひの(麦 阿)	吹なつくしそ <sup>文</sup> ―吹なすくしそ圍(河)(横 保平)―ふかきあらしそ(陽)	なれきとは <sup>文</sup> 圍(保)―なれにきと(河)(横 陽平)	よに <sup>文</sup> 圍(宮)(保麦阿)―世を(御七尾為平 大風)(陽) 下こそ <sup>文</sup> 圍(阿)―したはそ(河)(保)、こ となれ <sup>文</sup> 圍(阿)―ことなる(河)(保)
少女	幻	葵 須磨 手習	梅枝 胡蝶 梅枝 若菜下	葵 若菜上
秋好中宮	花散里	大宮 惟光 中将	夕霧 秋好中宮 兵部卿宮 中務の君	源氏

787 786 785 784 783

めつらしと古里人もまちそむむ花のにしきをきて帰君  
うき世にはゆき、ゑなんと思ひつ、おもひのほかに猶そほとふる  
よをすて、あかしのうらにすむ人も心のやみははるけしもせし  
いかならむよにかかれせんかきよのちきりむすへる草の庵は  
いつのまによもきかもと、むすほ、れ雪ふる里とあれしかきねそ

98ウ

\*487と重出歌  
猶<sup>〓</sup>園(河)―われ(別)

もと、<sup>〓</sup>御大池耕三―かと、為冬肖(河)(保

朝顔 源氏

わかれちにそへしおくしをかことにてはるけき中と神やいさめし

99オ

国)―やと、(陽)

絵合 朱雀院

すきにしか恋しきこともわすれねとけふはたまつも行心かな

早蕨 女房

あかつきのわかれはいつも露けきをこはよにしらぬ秋の空かな

賢木 源氏

よるへなみ風のさわかす舟人もおもわむかたにいそつたひせす

真木柱 夕霧

古の秋さへいまの心ちしてぬれにし袖に露そおきそふ

御法 頭中将

見し人もなき山里の岩かきに心なかくもはへるくすかな

総角 宮の大夫

こゝろいるかたならませは弓張の月なき空にまよはましやは

花宴 臘月夜

たえまのみよにはあやうさうし橋をくちせぬものとなをたのめとや

浮舟 浮舟

月影のやとれる袖はけはくともとめてもみはやあかぬ光を

須磨 花散里

法の師とたつぬる道をしるへにておもはぬ山にふみまとふかな

夢浮橋 薫